

Acquisition of Complex Clause Structures in English by Japanese Learners : In Contrast with Korean and Chinese Learners

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/44755

日本語母語話者の英語複文構造の習得に関する研究： 韓国語および中国語母語話者との対照

守屋 哲治

Acquisition of Complex Clause Structures in English by Japanese Learners : In Contrast with Korean and Chinese Learners

Tetsuharu MORIYA

1. はじめに

日本語を母語とする英語学習者が、母語である日本語の知識を、英語を学習する場合に用いることがある。このような現象を干渉 (transfer) という。干渉とは、第二言語の習得の際に母語の知識が第二言語の習得に影響を及ぼすことを言う。干渉は必ずしも言語習得にマイナスに働くとは限らないが、日本語母語話者が英語を習得しようとする場合は、日本語と英語の間に多くの点で違いがあるために干渉はマイナスに働くことがほとんどである。

干渉に関する研究には、音声や語彙に関するものが多い。統語レベルの干渉については、日本語のコロケーションや、時制・アスペクトなどをそのまま持ち込むことによって起こる間違いなどが注目されてきた。¹守屋 (2014) では、英語の関係節と同格節の区別と、寺村 (1975, 1977a, 1977b) の「内の関係」、「外の関係」の区別を比較し、日本語を母語とする英語学習者が、英語の関係節や同格節を習得する際にどのような誤りをしやすいかを考察し、さらに日本語を母語とする中学生の英作文データから実際の誤用の傾向を分析した。守屋 (2014) の分析は、修飾する節内に、修飾される名詞に対応する空所を持つ関係節と、そのような空所を持たない同格節という二種類の異なる修飾構造の存在が日本語にも英語にも存在することを前提とするものであった。

しかしながら、対照言語学および言語類型論

的研究の中には、言語によってはそのような二種類の修飾構造の区別が存在しないことがあり、日本語もそのような言語であるという主張がなされている (Matsumoto 1988, 1997, Comrie 1998, 2002; 松本 2014)。

そこで、本稿では、まず守屋 (2014) の概略を説明したうえでさらに、MatsumotoやComrieらの主張を紹介し、その主張に基づくと、日本語母語話者の英語学習者がどのような誤用をしやすいかに関する予測をする。その際、韓国語母語話者と中国語母語話者との差異についても予測を行う。

その上で、異なる母語を持つ英語学習者コーパスのデータを用いて、母語の違いによる名詞修飾構造の誤用の傾向を分析し、予測の妥当性を検討していく。

2. 日英語の名詞修飾節

守屋 (2014) では、日本語研究において節が名詞を修飾する型の分類として用いられている「内の関係」、「外の関係」と、英文法で用いられる「関係節」、「同格節」との対比から、日本語母語話者が英語を学習する際に日本語の「内の関係」、「外の関係」の概念を英語にも持ち込むことにより干渉が起こっていることを、日本の中学、高校生英語学習者による自由英作文データのコーパスであるJEFLL (Japanese EFL Learner Corpus) のデータを参照しながら明らかにした。

本節では、まず守屋 (2014) を概説した上で、積み残した問題点を提示する。

2.1. 「内の関係」、「外の関係」と「同格節」、 「関係詞節」

寺村 (1975) は、(2a) のように被修飾名詞が修飾節の中で何らかの格を持つ関係を「内の関係」と呼び、(2b) のように被修飾名詞が、修飾節の中で格関係を担うことのない関係を「外の関係」と呼んで区別している：

(2) a. [さんまを焼く]男

b. [さんまを焼く]句い

(2a) における「男」は「焼く」という行為の主体となっており、「男がさんまを焼く」のような主格の関係になっているのに対し、(2b) の「句い」は、「焼く」という行為自体には何ら関与しておらず、従って「句いでさんまを焼く」とか、「句いがさんまを焼く」といった表現は非文となる。

この「内の関係」、「外の関係」の区別は英語の「関係節」と「同格節」の区別にほぼ相当する：

(3) a. the news that John told me

b. the news that John passed the exam

(4) a. John told me the news.

b.*John passed the exam the news.

(5) a. John told the news to me.

b.*John passed the news to me.

(3a) の the news は (4a) や (5a) からわかるように従属節の中で動詞と格関係を持っているので、the news と修飾節の間には日本語における「内の関係」が成立している。英文法ではこのような関係を持つ修飾節を「関係節(relative clause)」と呼んでいる。一方、(3b) の the news は、(4b) や (5b) が非文であることからわかる通り、修飾節の動詞と格関係は持たず、修飾節は the news の内容を説明している。英文法ではこのような関係を持つ修飾節を「同格節(appositive clause)」と呼んでいる。

このように主たる特徴という点から言えば、

日本語の内の関係を持つ連体節と英語の関係節、および日本語の外の関係を持つ連体節と英語の同格節はほぼ同じものと考えられる。しかしながら、それぞれの言語でこれらがどのように機能しているかという観点から見ると、違いも存在する。

英語の場合には、修飾節と被修飾名詞との間に関係詞が介在し文法的関係を明示するが、日本語には関係詞にあたるものが存在しないため、修飾節と被修飾名詞との関係は、述部の意味から推定することになる。したがって、内の関係を持つ連体節が、どのような格に立つ名詞を修飾できるかにはある程度の制約がある。

(6) a. 彼がその町から引越してきた

b. 彼が引越して来た町

(7) a. 出刃包丁から血がしたたる。

b. 血がしたたる出刃包丁

(8) a. 太郎が結婚した花子。

b. 太郎が食事した花子。

c.?太郎が行った花子。

(6b), (7b) は、それぞれ (6a), (7a) からわかるように、被修飾名詞(「町」と「出刃包丁」)は連体節の中で助詞「から」で表される格関係に立っている。(8) の被修飾名詞「花子」は (8a,b,c) いずれの場合も、連体節の中では「と」で表される格関係に立っているが、「～と結婚する」や「～と食事する」の関係は述語から推定しやすいが、「～と行く」の「と」は述語から推定しにくいいため非文になると考えられる。²

また、英語の場合には、被修飾名詞が修飾節で補部になる場合を関係代名詞節、付加部になる場合を関係副詞節として区別しており、用いられる関係詞の種類も異なるが、日本語の場合には格関係が明示されず関係詞自体も存在しないため、「内の関係」を持つ連体節を、関係代名詞節的なものと関係副詞節的なものにおける根拠は存在しない。従って日本語を母語とする英語学習者にとっては、関係代名詞節と関係副詞節の区別が日本語の干渉により難しくなると考えられる。

寺村 (1974,1977b) は、「外の関係」について「ふつうの内容補充」と「相対的補充」の二種類に分けている。

「ふつうの内容補充」とは、被修飾名詞が持つ意味内容を、修飾する節が説明するもので被修飾名詞を主語、連体節を述語とした文に書き換えることができる。例えば (9a) は (9b) のように書き換えることができる。

- (9) a. 宮女たちが布を洗っていた姿
 b. (その) 姿は、宮女たちが布を洗っていたものだ。

「相対的補充」とは、修飾する節が名詞の内容を表すのではなく、因果関係や前後関係といった、相対的概念を示す働きをする。

- (11) a. 火事が広がった原因
 b. 深酒をした翌日
 c. 先頭集団が走っている前

(11a) は因果関係、(11b) は時間的前後関係、(11c) は空間的前後関係を表している。「相対的補充」の場合も被修飾名詞を主語、連体節を述部とする文に書き換えることはできるが、意味に違いが生じてくる。

- (12) a. 原因は火事が広がったことだ。
 b. 翌日は深酒をした。
 c. 前は先頭集団が走っている。

(11) と (12) では相対的関係が逆転していることがわかる。

「ふつうの内容補充」は英語の同格節の機能に対応している。しかし、「相対的補充」は英語では同格節で表すことはできない。(11) のような内容を英語で表す場合は、(13) のような表現になるだろう：

- (13) a. cause of the rapid-growing fire
 b. the day after I drank too much
 c. front of the leading group

このことから、英語の同格節は、日本語の「外の関係」の機能を持つ連体節のうち、「ふつうの内容補充」の連体節とのみ対応しており、「相対的補充」の機能をもつ同格節は英語には存在しないと言える。

しかし、「ふつうの内容補充」の場合でも、日本語と英語ではそのような関係を可能とする被修飾名詞の範囲が異なっている。日本語、英語ともに発話や思考を表す名詞は「ふつうの内容補充」を表す節による修飾を許す。³ また、「コト」を表す名詞では、「事実」、「話」、fact, storyなどは日英語ともに「ふつうの内容補充」が可能であるが、「運命」、「境遇」、「風習」、「癖」、「歴史」、「過去」、「作業」、「方法」、「準備」といった名詞は、日本語においては「ふつうの内容補充」が可能であるが、英語においては不可能である。

2.2. 英語学習者の誤用

以上のような対比から守屋 (2014) では以下のような予測を立てた。

- (14) a. 日本語には関係詞が明示的に存在しないので、関係代名詞構文と関係副詞構文の区別があいまいになり、関係代名詞構文と関係副詞構文の混同が起こりやすい。
 b. 日本語の「外の関係」に立ちうる名詞の種類に比べ、英語の同格節構文に用いられる名詞の種類は限られているため、英語学習者は同格節構文を過剰一般化して英語では同格節を本来用いることのできない場合にも用いてしまう。

これらの予測を中学・高校生の英作文コーパスである日本人英語学習者自由英作文コーパス (Japanese EFL Learner Corpus: JEFLL) のデータ観察から確認を試みた。

関係節のデータについては、被修飾名詞として、場所を表す place, village と時を表す time, day を取り上げ、which, when, where で導かれる関係詞を用いている用例を抽出した。その結果、place, time, day などでは関係詞がおおむね適切に用いられている一方、village では関係詞が適切に用いられる例が見あたらなかった。これは、place, time, day などの名詞と関係詞節との

つながりは、チャンクとして覚える可能性が高いがvillageのような具体的な名詞では、修飾する節の機能をきちんと理解していなければ関係詞節の選択が適切にできないため、関係代名詞節と関係副詞節の混同がおこりやすいためと考えられる。

また、同格節についてはchange, past, sound, customといった名詞に同格節を接続するという過剰生成が見られることを指摘した。

3. 一般的名詞修飾節

2節でみたように、日本語では、内の関係と外の関係とを区別するのは、被修飾名詞が修飾節内で格関係を持つか否かである。また、同格節にあたる「外の関係」では、英語の同格節以上に許容範囲が広い。

Matsumoto (1988,1997) および松本 (2014) は、日本語には関係節と同格節の区別はなく、いずれの場合も、修飾節が被修飾名詞に前置され、その名詞の内容を説明するという一般的名詞修飾節 (general noun modifying clause) であるという主張をしている。

英語の場合は、関係詞節は 1) 明示的な関係詞が修飾節と被修飾名詞の間に置かれるという点と、2) 非修飾名詞が修飾節中で果たす役割が空所化するという2点で同格節と明示的に区別することができる。

(15) a.the book which John bought ϕ

b.the fact that John bought a book

(15a) の関係詞節では関係代名詞whichが明示的に被修飾名詞と修飾節をつないでおり、被修飾名詞the bookが修飾節内で働く目的格の部分で ϕ で示した通り空所となっている。一方、(15b) の同格節では、被修飾名詞と修飾節の間をつなぐことができるのは接続詞thatであり、関係詞whichを用いると非文となる。また、被修飾名詞the factは修飾節内では格関係を持たないため、修飾節内に空所は存在しない。

それに対して、日本語の場合には前節でも見たように、被修飾名詞と修飾節の間をつなぐ明

示的な形態素は存在しない。また、日本語の場合には、英語と異なり、格関係にある名詞をすべて明示しなければならないという制約は存在しない：

(16) [ϕ ϕ 呼んでいる] 子供はどこですか。

(Matsumoto 1997:39)

(16)の例では、修飾節中の主語、目的語の両方が省略されているため、被修飾名詞の「子供」は修飾節中で主語の役割を果たすのか、目的語の役割を果たすのかが、構造だけでは決定できない。さらに、修飾節内部の空所の有無によって関係詞節と同格節を区別することができないことになる。

このような特徴を持つ日本語では、統語上は、修飾節が被修飾名詞の前に置かれる単一の構造を持ち、修飾節が被修飾名詞に対してどのような意味関係を持ちうるかは、話者と聴者が共有する認知フレームに依存すると主張している (Matsumoto 1988, 1997)。 (16) の例で言えば、「子供」が誰かを呼んでいるのか、誰かに呼ばれているのかは、その状況における話者と聴者が共有している文脈理解に依存している。また、従来「内関係」とされてきた (17) の例では、被修飾名詞「本」と修飾節「学生が買う」を関係づけるフレームは簡単に想起できる。また、「外関係」とされている (18) のような例も、「頭が良くなる」という修飾節と「本」を関連づけるフレームは比較的容易に想起できる。しかし「外関係」とされてきた (19), (20) のような例は、文化的な背景となるフレームを共有していないと関係付けが困難になる。このように、修飾節と被修飾節の関連付けを可能にするフレームに関しては、容易に想起されうるものから、かなり文化的背景を共有していないと想起されにくいものまで段階性があると主張している (Matsumoto 1988)。

(17) [学生が買った] 本

(18) [頭のよくなる] 本

(19) [太らない] お菓子

(20) [トイレに行けない] コマーシャル

Comrie (1998) では、このような一般的名詞修飾節が言語類型論的に見て、おおよそどのような地域の言語に見られるのかを概観している。それによると、日本語に見られるような一般的名詞修飾節の特徴は、韓国語、アイヌ語、中国語などには見られる。東南アジアでは、カンボジアのクメール語にこの特徴が見られるが、ベトナム語には見られないというように一般的名詞修飾節を持つ言語と持たない言語の境界線があるとしており、同様の境界線は、チベット語族のチベット・ビルマ語派、トルコ語族などの地域にも見られるという。このような観察を踏まえると、一般的名詞修飾節の特徴は、大まかにいって、アジアの言語によって共有されていると考えられる。

松本 (2014) は、一般的名詞修飾節の特徴を持つ言語間の比較を行っている。日本語と同じように、「内の関係」、「外の関係」を同じ形態で表す日本語、韓国語、中国語の中では日本語がもっとも制約が緩く、連体形と終止形の同一化に見られるような文法的明示性の低さが関係しているのではないかと述べている。例えば、韓国語の同格節にあたる構造では、被修飾名詞の種類によって修飾節内の述部の形式が限定されていたり、「本を買ったおつり」に対応する言い方は、「本を買って残ったおつり」のようにより明確な表現が必要となるという。また、中国語の場合では、「太らないお菓子」のような構造は可能であるが、「頭が良くなる本」のように因果関係を表す場合には、「頭を良くする本」のように因果関係を明示する必要があるという。また、韓国語では、名詞修飾節の動詞の活用が、独立節の動詞の活用とは異なったり、中国語では、名詞修飾節と被修飾名詞の間に「的」が介在することによって、日本語よりも修飾関係が明示されやすくなっている。⁴

以上の点を踏まえると、日本語母語話者が英語の名詞修飾構造を習得する際に、以下のような

誤りの傾向が見られることが予測される：

(21) 日本語は名詞修飾節を示す明示的構造を持たず、関係詞、同格節といった区別も存在しないため、英語の関係詞の習得にあたっては関係副詞と関係代名詞の混同だけでなく、同格節との混同も見られる。

(22) 同じ一般的名詞修飾節を持つ、日本語、韓国語、中国語の中でも、日本語は最も制約が緩く、かつ、韓国語、中国語と違って形態的な明示がないため、韓国語母語話者や中国語母語話者よりも(21)の誤用は多くなる。

これらの予測を、国際的に同一の条件で英語学習者のデータを収集しているコーパスを用いて検証していく。

4. ICNALEについて

守屋 (2014) では日本の中学生、高校生の英語学習者コーパス (JEFL) を用いたが、今回は日本語母語話者だけでなく、韓国語母語話者および中国語母語話者の英語学習者を対象とした学習者コーパスが必要になる。また、学習者の習熟度による違いや、母語の種類による違いなどを調査するためには、統一した条件の下で収集され、学習者の習熟度も明示された英作文のデータが必要となる。

このような条件を満たした学習者コーパスが The International Corpus Network of Asian Learners of English (ICNALE) である。これは、神戸大学の石川慎一郎教授が構築したもので、アジアの10カ国の大学生英語学習者（日本、香港、パキスタン、タイ、中国、台湾、インドネシア、フィリピン、シンガポール）および英語母語話者（学生および英語教師）が同一条件で書いたエッセイをコーパス化したものである。コーパスの語数は約130万語（内、英語母語話者のデータが約9万語）で、被験者の学習動機、習熟度レベルなどの情報も付加されているため、動機別、習熟度レベル別のデータ抽出も可能に

なっている。⁵

ICNALEは書き言葉 (ICNALE written) と話言葉 (ICNALE spoken) に分かれているが、本研究が行われた時点で公開されているのは書き言葉のみであった。書き言葉は、以下のような条件の下に作成されている。

課題 : Do you agree or disagree with this statement? Use reasons and specific details to support your claim.

- (A) It is important for college students to have a part time job.
 (B) Smoking should be completely banned at all the restaurants in the country.

時間 : 1つのエッセイにつき20分から40分
 長さ : 200語から300語 (+-10%)

辞書の使用 : 不可

スペルチェッカーの使用 : 必須

10カ国の大学生の参加者のうち、外国語として英語(EFL)を学習しているのは、中国、インドネシア、日本、韓国、タイ、台湾の六カ国であるが、この六カ国の参加者の数、エッセイ数、トークン数は表1の通りである。

表1 EFL学習者参加者の概況

国名	参加者数	エッセイ数	トークン数
中国	400	800	194,631
インドネシア	200	400	92,361
日本	400	800	176,537
韓国	300	600	130,626
タイ	400	800	176,936
台湾	200	400	89,736

また、参加者の習熟度は、CEFR (Common European Framework of Reference) が提唱しているレベル分類が用いられている。このレベルの分類基準および、上記六カ国の参加者の習熟度の分布は表2の通りである。

表2 参加者の習熟度レベル分布

レベル	A2	B1_1	B1_2	B2+
TOEIC	545以下	550-665	670-780	785以上
TOEFL	56以下	57-71	72-86	87以上
中国	12.5%	58.0%	26.3%	3.3%
インドネシア	16.0%	41.0%	41.5%	1.5%
日本	38.5%	44.8%	12.3%	4.5%
韓国	25.0%	20.3%	29.3%	25.3%
タイ	29.8%	44.8%	25.0%	0.5%
台湾	14.5%	43.5%	30.5%	11.5%

Council of Europe (2001) において定められている習熟度レベルの説明によると、A2のレベルはWaystageとよばれ、個人的情報や家族について語ったり、買い物をする際に用いる文や表現を理解でき、簡単な定型の表現で日常的なことをやりとりできる段階である。B1はThresholdと呼ばれ、仕事、学校、余暇などで出会う日常的な事柄に関する情報の要点を押さえることや、個人的な事柄や身の回りのことについてやりとりすることができ、経験や夢などについて理由付きで語ることができるレベルとされている。さらにB2はVantageと呼ばれ、具体的な事柄だけでなく、抽象的な事柄や自分の専門分野の技術的な議論の要点を理解することができ、目標言語の母語話者とも緊張することなくやりとりができるレベルである。

5. コーパス調査

今回は、関係代名詞として用いられるwhichに着目し、日本語母語話者、韓国語母語話者、中国語母語話者の間で、誤用の数や性質にどのような違いが見られるかを調査した。日本語、韓国語、中国語はいずれも一般的名詞修飾節を持つ言語であり、松本 (2014) が指摘している通り、日本語に比べて韓国語や中国語はその種類に制約がある。また、日本語においては、名詞修飾節を明示的に示す標識がないので、その点でも日本語の一般的名詞修飾節の干渉が起きやすいことが考えられる。

コーパスの中からwhichが用いられている文をKWIC形式で抽出し、ひとつひとつの用例について、目視で関係詞であるか疑問詞であるかを確認していった。そして関係詞として用いられているwhichの中で、関係詞節内に空所を含まないもののみを誤用とし、時制や人称などの間違いのみを含む例は、今回の調査では誤用とはしなかった。

例えば (23a) は名詞修飾節内に空所が存在しないので誤用と判定する。一方、(23b) の場合はwhichの先行詞と名詞修飾節の主述関係が英語としては成り立たず不適切な文ではあるが、名詞修飾節内に空所は存在するため、本研究では誤用の数に含めていない。

- (23) a. At the place which we are working
(JPN_B12)
b. the restaurants is public places which φ
coexist smokers and nonsmokers.
(KOR_B2)

各用例の末尾にある文字列は、その用例を用いた学習者の母国および習熟度レベルを表している。JPNは日本、KORは韓国、CHNは中国を表しており、またA2, B11, B12, B2はそれぞれ習熟度レベルを表している。

また、本研究では、名詞修飾節中に空所を持たない(23a)のような誤用をさらに二種類に分類した。一番目のタイプは、本来関係副詞を用いるべきところにwhichを用いている誤用である。(23a)はこの種類に属する。もうひとつのタイプは、同格節を導くthatの代わりにwhichを用いる誤用である。

- (24) a. Some people agree with the idea which
part time job is very good for college
students.(CHN_A2)
b. Surely smokers have a right which they
can smoke.(JPN B_12)

(24a) の例では、同格節のthatをwhichに置き換えたものと考えられるが、(24b) では、英語では同格節を導かない名詞であるrightに名詞修飾節を接続している。今回の分析では、(24a,b)

いずれの場合も同格節タイプの誤用として扱う。

6. 結果と考察

3節では、日本語に見られる一般的名詞修飾節を取り上げ、韓国語や中国語とその類似点・相違点について述べた。それに基づいて3節で提示した予測(21), (22)を再掲する。

- (21) 日本語は名詞修飾節を示す明示的構造を持たず、関係詞、同格節といった区別も存在しないため、英語の関係詞の習得にあたっては関係副詞と関係代名詞の混同だけでなく、同格節との混同も見られる。
(22) 同じ一般的名詞修飾節を持つ、日本語、韓国語、中国語の中でも、日本語は最も制約が緩く、かつ、韓国語、中国語と違って形態的な明示がないため、韓国語母語話者や中国語母語話者よりも(21)の誤用は多くなる。

日本、韓国、中国の参加者のwhichに関する誤用の分析結果は以下の通りである。習熟度レベル別に関係副詞タイプの誤用と同格節タイプの誤用の数を記した。「用例数」は当該レベルの学習者が用いた関係詞whichの数を指し、「割合」は用例数に占める誤用の割合を表している。

表3 日本人の誤用分析結果

	関係副詞	同格節	用例数	割合
B2	0	0	20	0.0%
B12	2	3	48	10.4%
B11	6	6	140	8.6%
A2	8	10	144	13.2%
計	16	19	352	9.9%

表4 韓国人の誤用分析結果

	関係副詞	同格節	用例数	割合
B2	0	0	84	0.0%
B12	1	0	46	2.2%
B11	0	3	19	15.8%
A2	0	0	15	0.0%
計	1	3	164	2.4%

表5 中国人の誤用分析結果

	関係副詞	同格節	用例数	割合
B2	0	0	22	0.0%
B12	1	2	170	1.8%
B11	1	1	305	0.7%
A2	0	3	49	6.1%
計	2	6	546	1.5%

まず、表3から、日本人英語学習者が、関係詞whichを誤って用いる割合がおおよそ10%になっていることがわかる。B2レベルの学習者には誤用が見られなかったが、それ以外のレベルの学習者では、10%前後の誤用があることがわかる。しかも、関係副詞タイプと同格節タイプの誤用がほぼ同数であり、(21)の予測に概ね合致する結果になっている。

このような結果から、日本人の初級段階の英語学習者には、日本語の一般的名詞修飾節の性質を、英語学習の際にも適用する転移が起こりやすいことがわかる。

それに対して、表4、表5からわかるとおり、韓国人および中国人学習者の誤用は、日本人と比べてきわめて少ない。いずれの場合も日本人学習者同様B2レベルの学習者には誤用が見られなかったが、それ以下のレベルにおいても誤用が少なく、全体として2%前後の割合となっている。このことから、(22)の予測も概ね正しいと考えられる。

関係代名詞whichの用例については、上記のようにわりあいとはっきりとした結果が出たが、注意すべき要因もいくつかある。まず、参加者の国ごとにwhichの用例数自体がばらついている点である。韓国の学習者の用例が164と一番少なく、日本の学習者が352、中国の学習者が546となっている。表1に示したそれぞれのトークン数に対する割合は、韓国が0.13%、日本が0.20%、中国が0.28%とやはり違いがある。この差が何を意味するのかは、whichだけを見ていてもはっきりしない。他の名詞修飾節の表現手段と対比していくことが必要となる。

さらに、参加者の習熟度レベルにもばらつきがあるため、それが差の原因になっていないのかを慎重に見極める必要がある。表2からわかるとおり、日本人の参加者は、A2とB11のレベルで83.3%を占めているのに対し、中国人の参加者は、70.5%、韓国人の参加者では45.3%となっていて、初級の学習者の参加割合が日本は他の2カ国に比べて高くなっている。このばらつきが誤用例の数の差を生んでいる要因になっていることも考えられる。今後このような点にも注意しながらより多面的に調査を行う必要がある。

7. まとめ

英語では名詞を修飾する節が関係詞節と同格節に分類されることから、守屋(2014)では英語名詞修飾節に関する日本語母語話者の誤用について、日本語における同様の分類を前提とし、その分類の中での対応のずれという観点から分析を行ってきた。しかしながら、Matsumoto(1997)に代表される一般的名詞修飾節の考え方に立つと、日本語母語話者は関係詞節と同格節という概念の区別自体を持っていないことになり、さらに、日本語では形態上、名詞修飾節を主節と区別する手段をもたないため、このような名詞修飾節の分類に気づきにくいことが予測される。

本研究で行った誤用調査および分析でこのような傾向がある程度確認できたと言える。また、Matsumoto(1997)などの主張の裏付けにもなり得る。しかしながら今回は関係代名詞whichの誤用に関するデータのみであったため、あくまでも試行的な調査にとどまっている。今後は、調査する誤用の対照を広げ、データ自体に関しても本研究の目的に合った形であらたに収集していく必要もある。

謝辞

本研究は平成27年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号25370698)の補助を一部受けて

行われています。

注釈

1.例えば、時制と相の日英語の対照およびそれが日本語母語話者の英語習得に与える影響などについては、Ota (1972) や太田 (1977) を参照。守屋 (2012) には、これらの研究の概略が紹介されている。

2.「～と結婚する」の「と」は寺村 (1977a) のいう「相棒のト」であり、英文法における補部 (complement) にほぼ相当する。一方、「～と食事する」や「～と行く」の「と」は「連れのト」であり、付加部(adjunct)に相当する。同じ付加部の格に立つ場合でも、(8b, c) のように容認度に差が生じることから、内の関係の成立条件を単純に補部か付加部かということで決めることはできない。

3.松本 (2014) では、「内の関係」に相当する修飾構造を「節主体型」、「外の関係」の内、英語の同格節に相当するような構造を「名詞主体型」、そして「さんが焼ける匂い」のようなタイプを「節および名詞主体型」と呼んでいる。

4.下地 (2014) によると、中国語は、日本語に比べて連体節の使用頻度が低く、そのほとんどがプロトタイプ的な関係節であるとされているとのことである。

5.ICNALEは以下のサイトから、無料でアクセスできる。

<http://language.sakura.ne.jp/icnale/>

インターネット上で検索が可能なonline versionと、データをそのままダウンロードして各自の検索ツールを使って検索を行うためのdownload versionの2種類がある。本論文で用いたのはonline versionである。このコーパスの概要についてはIshikawa (2013) を参照。

参考文献

- Comrie, Bernard. 1998. "Attributive Clauses in Asian Languages: Towards an Areal Typology" in Winfried Boeder et al (eds.), *Sprache in Raum und Zeit: In Memoriam Johannes Bechert, Band 2*. Tübingen: Gunter Narr, 51-60.
- Comrie, Bernard. 2002. "Typology and Language Acquisition: the Case of Relative Clauses", in Anna G. Ramat (ed.) *Typology and Second Language Acquisition*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 19-37.
- Council of Europe. 2001. *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge: Cambridge University Press. [Online](accessed September 24, 2015) <http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/source/framework_en.pdf>
- Ishikawa, Shin'ichiro. 2013. "The ICNALE and Sophisticated Contrastive Interlanguage Analysis of Asian Learners of Language", in Shin'ichiro Ishikawa (ed.) *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, 1, 91-118.
- Matsumoto, Yoshiko. 1988. "Semantics and Pragmatics of Noun-modifying Constructions in Japanese", in *Berkeley Linguistics Society* 14: 166-175.
- Matsumoto, Yoshiko. 1997. *Noun-Modifying Constructions in Japanese: A Frame Semantic Approach*. Amsterdam: John Benjamins.
- 松本善子. 2014. 「日本語の名詞修飾節構文：他言語との対照を含めて」、益岡隆志他編『日本語複文構造の研究』東京：ひつじ書房 559-590.
- 守屋哲治. 2012. 「日英語時制体系の対照言語学的研究：英語学習者の誤用の傾向を踏まえて」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』4, 85-95.
- 守屋哲治. 2014. 「日英語複文構造の対照言語学的研究：英語学習者の誤用の観点から」『金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要』6, 49-59.
- Ota, Akira. 1972. "Tense Correlations in English and Japanese." *Studies in English Linguistics* 2,

121-134.

- 太田朗. 1977. 「日英語の比較—時制と相について」
『英語学と英語教育をめぐって』, 211-252, 東京:
ELEC.
- 下地早智子. 2014. 「中国語の連体修飾節の構造と意味:
いわゆる「内容節」を中心に」益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』東京:
ひつじ書房 591-615.
- 寺村秀夫. 1975. 「連体修飾のシンタクスと意味その
1」, 『日本語・日本文化』4, 71-119, 大阪外国語

大学留学生別科 (寺村(1992)に収録).

- 寺村秀夫. 1977a. 「連体修飾のシンタクスと意味 その
2」. 『日本語・日本文化』5, 29-78, 大阪外国語
大学研究留学生別科 (寺村(1992)に収録).
- 寺村秀夫. 1977b. 「連体修飾のシンタクスと意味 その
3」. 『日本語・日本文化』6, 1-35, 大阪外国語大
学研究留学生別科 (寺村(1992)に収録).
- 寺村秀夫. 1992. 『寺村秀夫論文集 I — 日本語文法編
—』東京: くろしお出版.